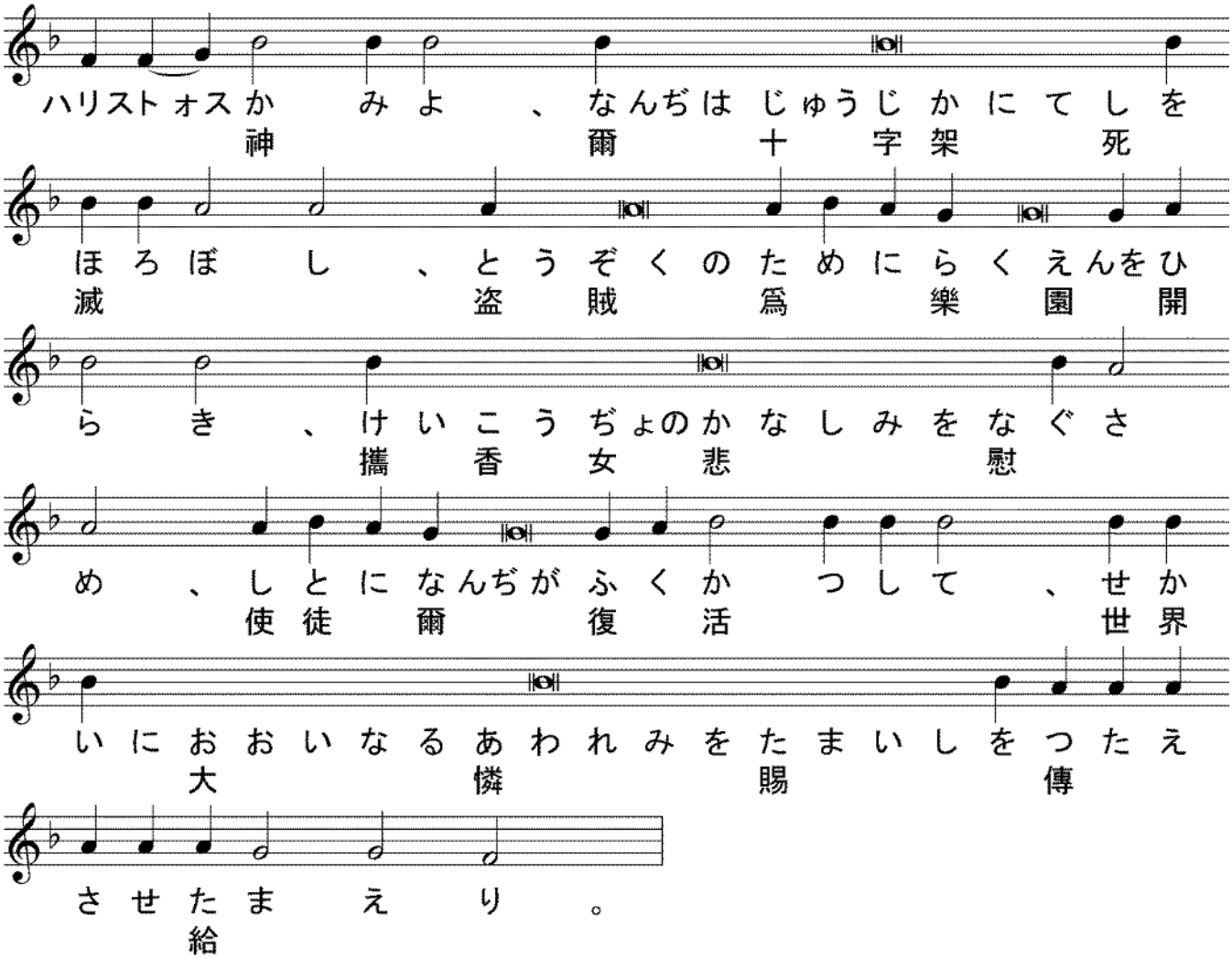
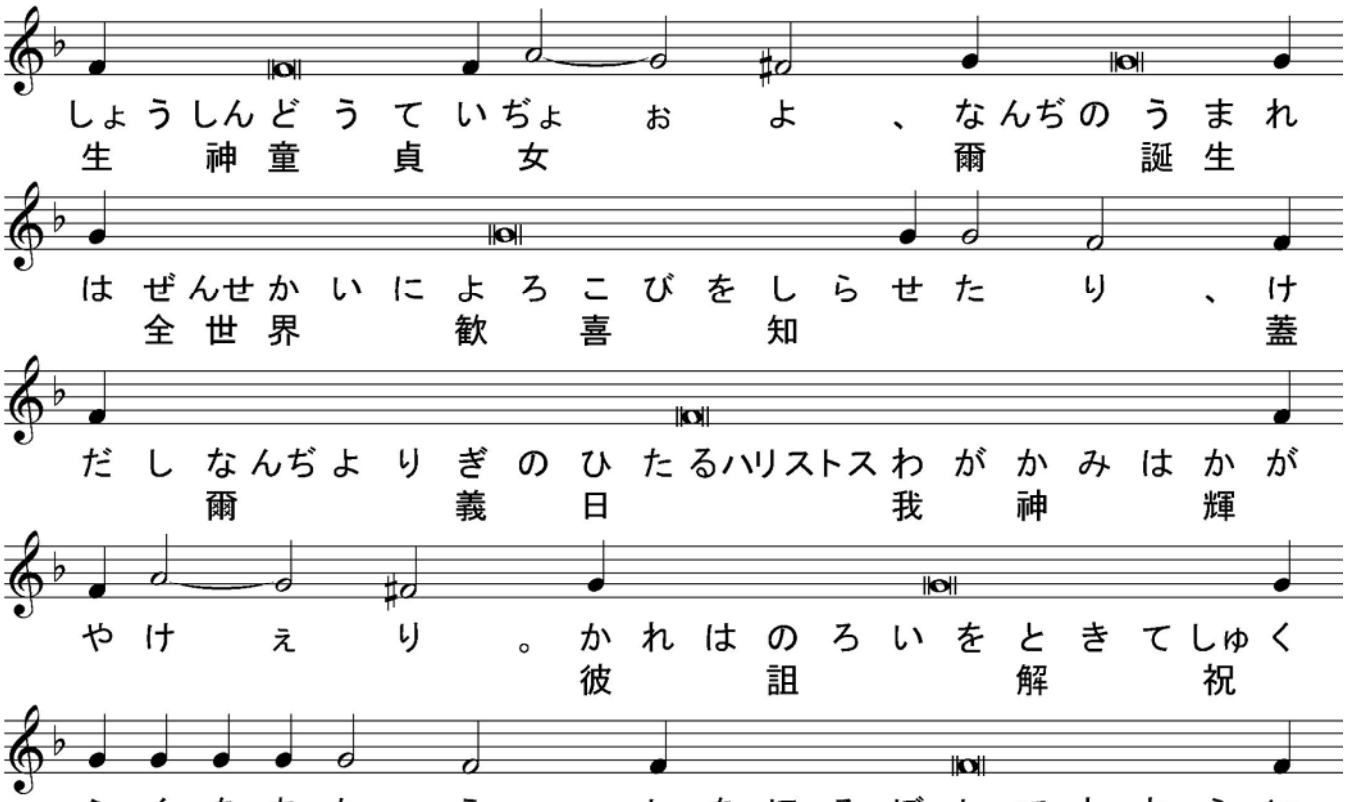
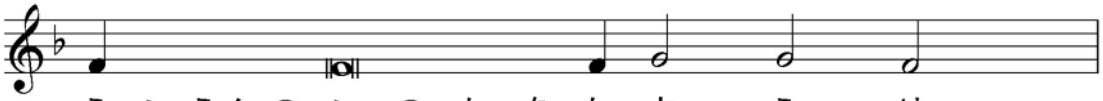
【　復活のトロパリ　第７調　】



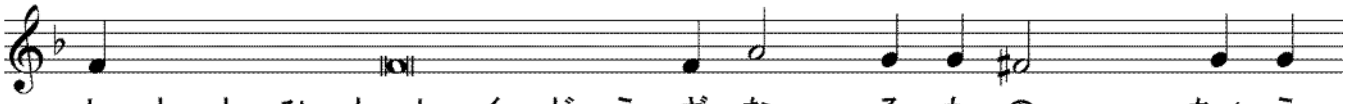
【　生神女誕生祭のトロパリ　第４調　】



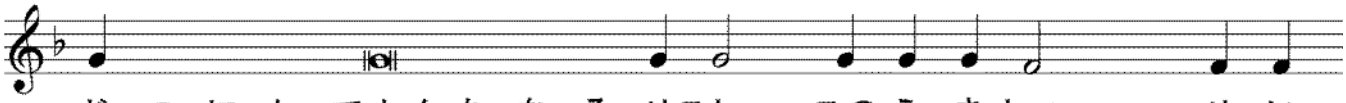


えいえんのいのちをたまえり。
永遠生命賜

【　日本の亜使徒ニコライのトロパリ　第４調　】

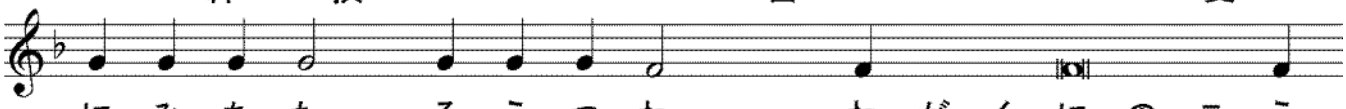


しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
使徒等同座者忠

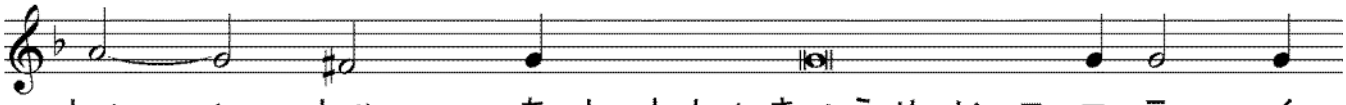


じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
實神智役者聖

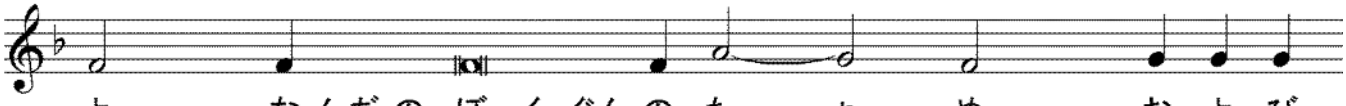
なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい
神撰笛愛



にみちたるうつわ、わがくにのこう
滿器我國光

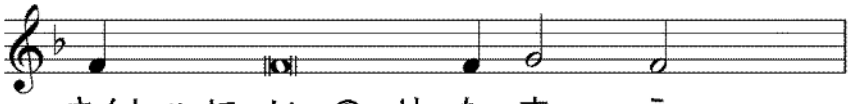


しょおしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
照者亜使徒主教聖



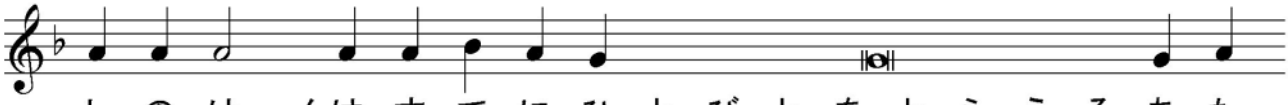
よ、なんぢのぼくぐんのたぁめ、および
爾羊群爲及

ぜんせかいのために、いのちをたもうせい
全世界爲生命賜聖



さんしゃにいのりたまえ。
三者祈給

【　復活のコンダク　第７調　】



しのけんはすでにひとびとをとらうるあた
死權已人人捕能

わ ず 、 け だ しハリスト スはく だ り て そ の ち
蓋 降 力

か ら を や ぶ り て ほ ろ ぼ し た ま え り 。 ぢ ご
敗 滅 給 地 獄

く は し ば ら れ 、 よ げんしゃは ど う し んに よ ろ
縛 預 言 者 同 心 喜

こ び て よ ぶ 、 きゅ う せ いしゅ は しんに お る
呼 救 世 主 信 居

も の に あ ら わ れ た り 、 しんじゃよ 、 ふ く
者 現 信 者 復

か つ し て い で よ 。
活 出

【　日本の亜使徒ニコライのコンダク　第４調　】

こ う え い は ち ち と こ ぉ と せ いしんに き
光 榮 父 子 聖 神 歸

す 、

せ い せ いしゃあ し と せ い ニ コ ラ イ よ 、 わ が
成 聖 者 亞 使 徒 聖 我

く に なんぢを た び び と お よ び い ほ うじんと う け
國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

し に 、 なんぢ は は じ め わ が く に に お い て お の
爾 初 我 國 於 己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの
外來者知

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて
光暖流爾敵

きをぞくしんのことなぁし、かれらにか
屬神子爲彼等神

みのおんちょうをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
恩寵與教會建

たり、いまこのきょうかいのためにいのり
今此教會爲祈

たまぁえ、けだしわれらそのしょしはなん
給蓋我等其諸子爾

ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
呼我善牧者慶

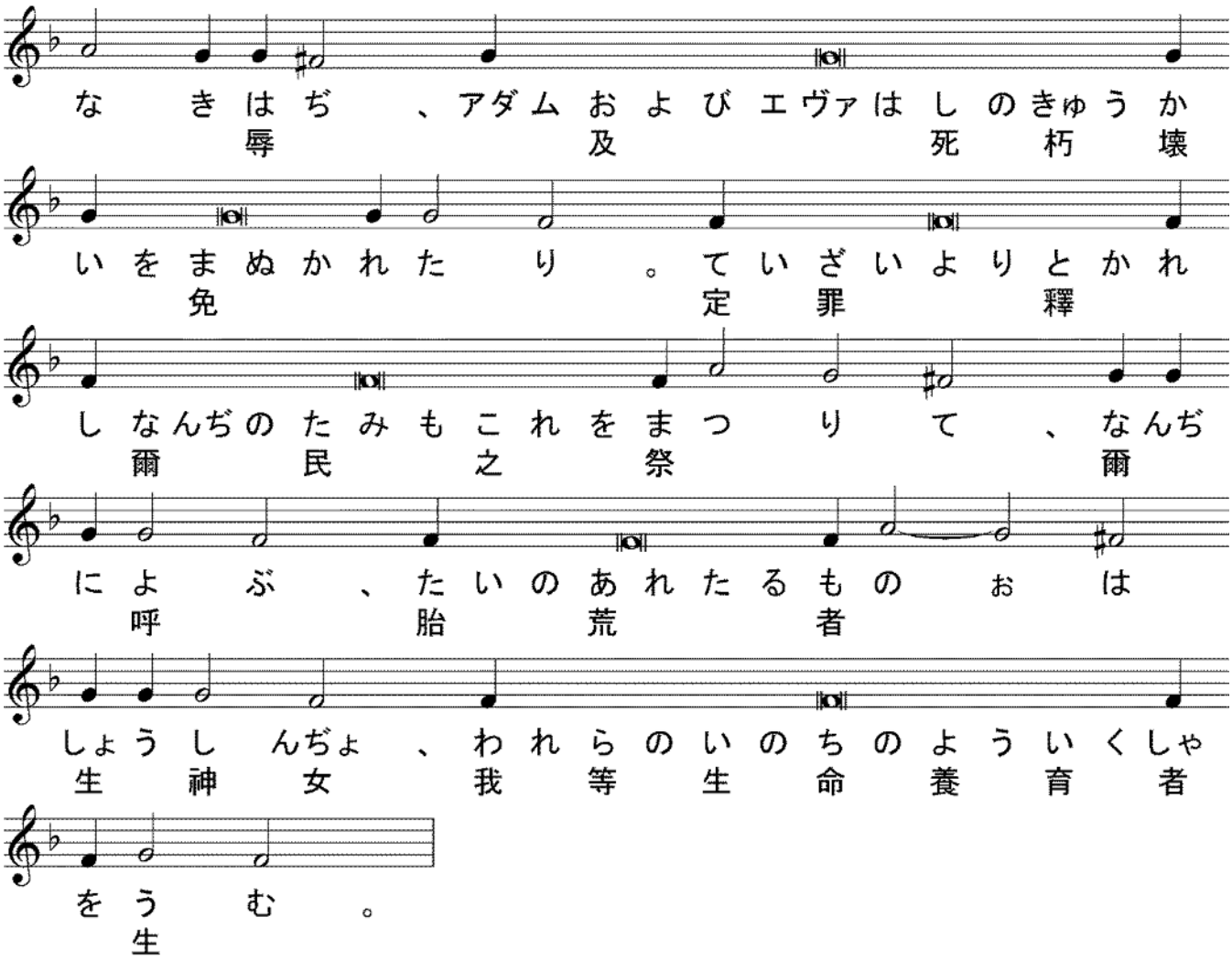
べよ。

【　生神女誕生祭のコンダク　第４調　】

いまもいつぅもよよに、アミン。
今何時世世

しじょうなるものぉよ、なんぢのせいなる
至淨者爾聖

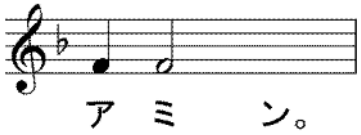
うまれによりて、イォアキムおよびアンナはこ
誕生因及子



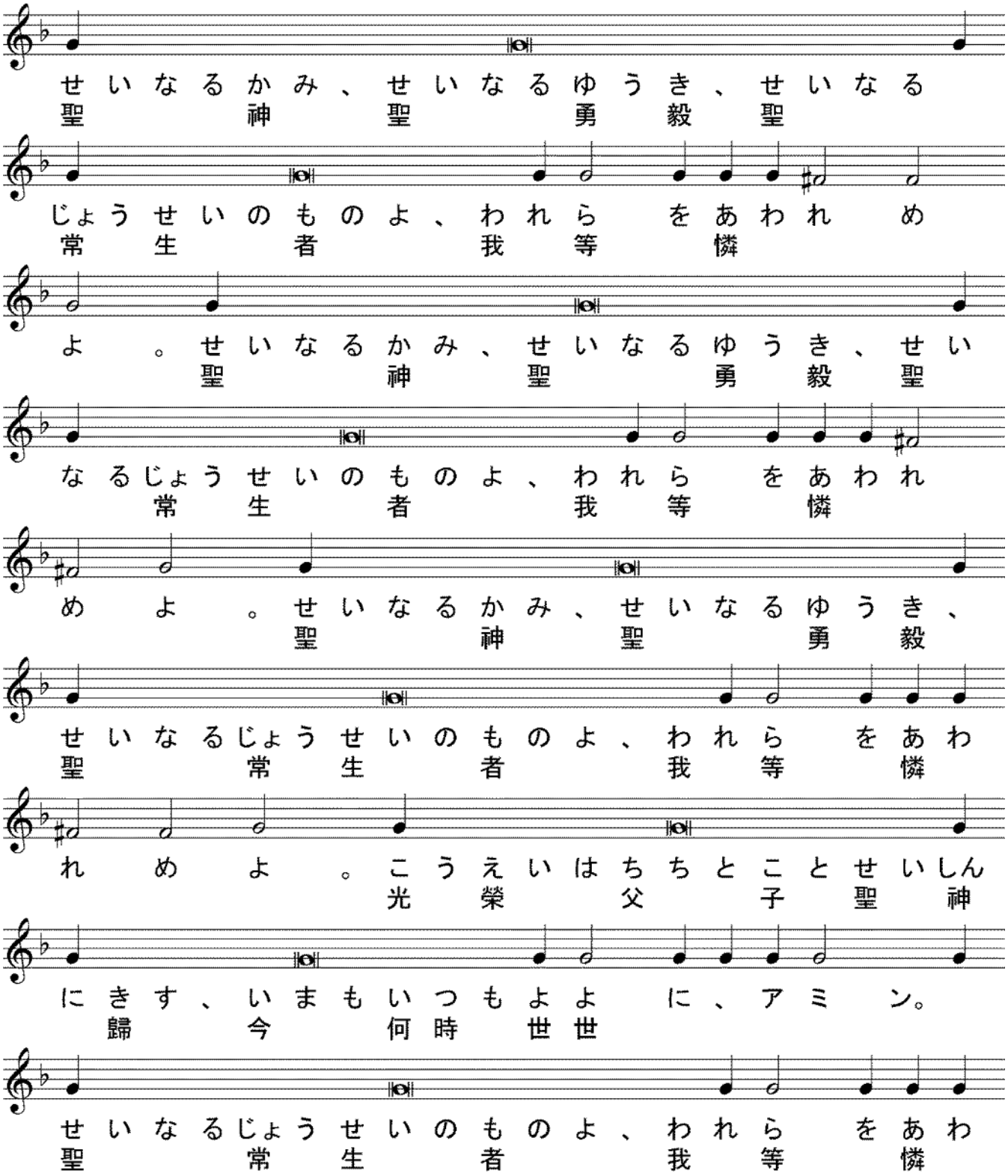
司祭）（ 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、其救の爲に痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讃榮を奉るに堪うる者となしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 ）

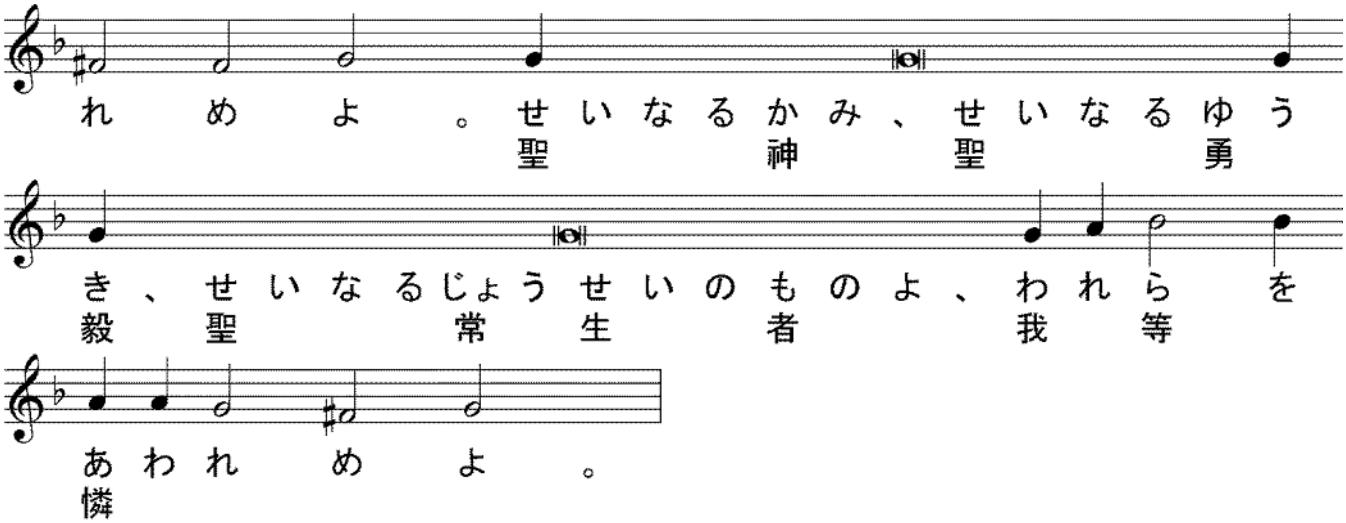
司祭）蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、


ア ミ ン。

【　聖三祝文　】


せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖 神 聖 勇 毅 聖
じょうせいのものよ、われら をあわれ め
常 生 者 我 等 憐
よ 。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖 神 聖 勇 毅 聖
なるじょうせいのものよ、われら をあわれ
常 生 者 我 等 憐
め よ 。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖 神 聖 勇 毅
せいなるじょうせいのものよ、われら をあわ
聖 常 生 者 我 等 憐
れ め よ 。こうえいはちちとことせいしん
光 榮 父 子 聖 神
にきす、いまもいつもよよ に、アミ ン。
歸 今 何 時 世 世
せいなるじょうせいのものよ、われら をあわ
聖 常 生 者 我 等 憐



司祭）（ 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、 ）

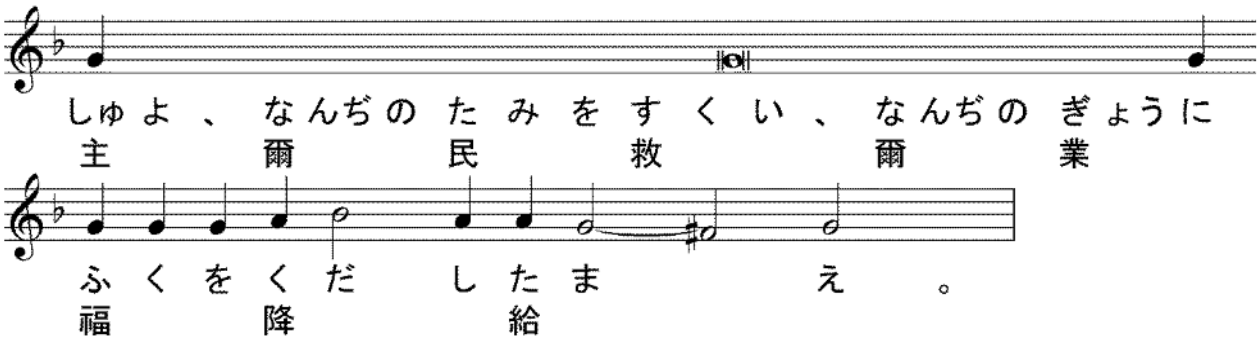
【 提綱 十字架擧榮祭前の主日 第６調 及び 生神女の歌 第３調 】

司祭）慎みて聽くべし、衆人に平安、

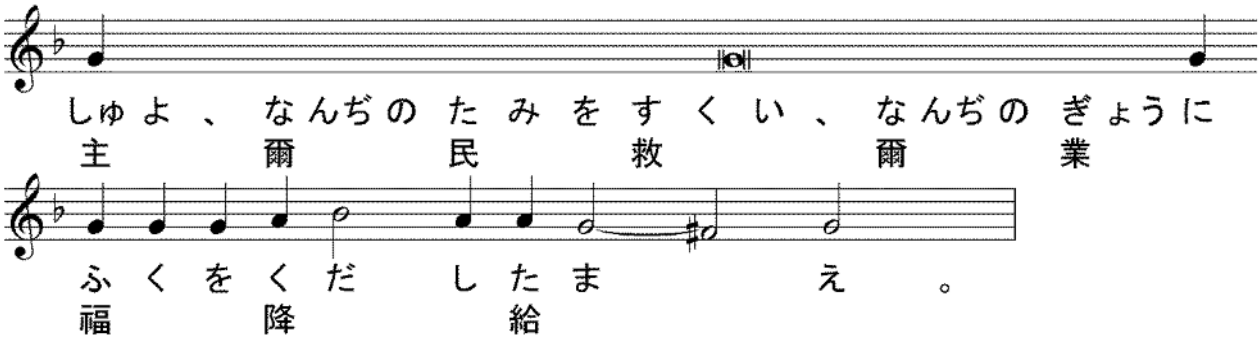
誦經）爾の神にも、

司祭）睿智、

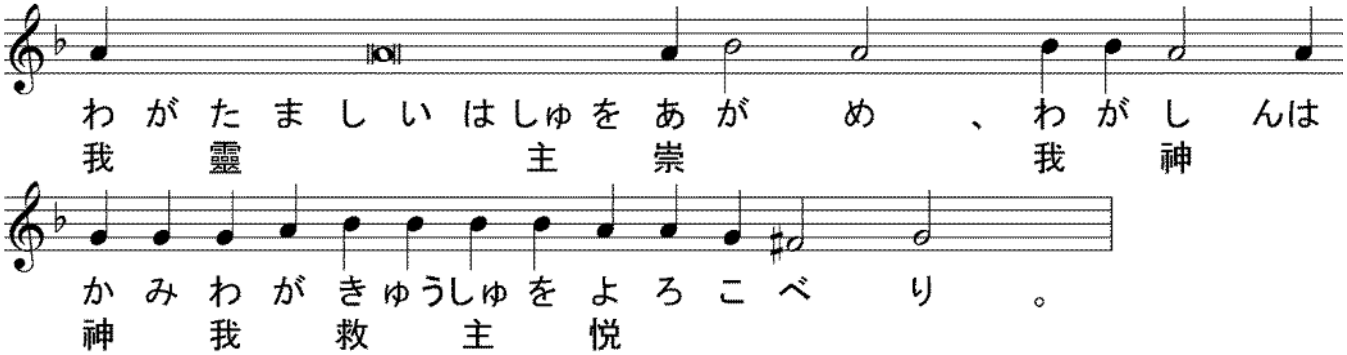
誦經）プロキメン、主よ、爾の民を救い、爾の業に福を降し給え、



誦經）主よ、我爾に呼ぶ、我の防固よ、我が爲に默す毋れ、



誦經）我が靈は主を崇め、我が神は神我が救主を悅べり。



【 使徒經（アポストロス） 215端 ガラティヤ書6章11〜18節（十字架擧榮祭前の主日）

181端 コリンフ後書6章1〜10節（第16主日）

240端 フィリッピ書2章5〜11節（生神女誕生祭） 】

司祭）睿智（えいち）、

誦經）聖使徒パヴェルがガラティヤ人（じんたつ）に達（しょ）する書（よみ）の讀、

司祭）謹（つつし）みて聽（き）くべし、

誦經）兄弟（けいてい）よ、視（み）よ、我手（われて）づから爾等（なんぢら）に幾許（いくばく）か多（おお）く書（しょ）したるを。肉（にく）を以（もつ）て誇（ほこ）らんと欲（ほつ）する者（もの）が、爾等（なんぢら）を強（し）いて割禮（かつれい）を受（う）けしむるは、唯（ただ）ハリストスの十字架（じゅうじか）の故（ゆえ）に由（よ）りて、窘逐（きんちく）を受（う）けざらん爲（ため）のみ。蓋（けだし）割禮（かつれい）を受（う）くる者（もの）は、己（おのれ）も律法（りつぽう）を守（まも）らず、然（しか）るに爾等（なんぢら）に割禮（かつれい）を受（う）けしめんことを欲（ほつ）するは、爾等（なんぢら）の肉（にく）を以（もつ）て誇（ほこ）らん爲（ため）なり。我（われ）に在（あ）りては、我等（われら）の主（しゅ）イイスス ハリストスの十字架（じゅうじか）の外（ほか）に誇（ほこ）る所（ところ）なし、此（これ）に由（よ）りて世（よ）は我等（われら）の爲（ため）に釘（てい）せられたり、我世（われよ）に於（おい）ても亦（またしか）然（しか）り。蓋（けだし）ハリストス イイススに在（あ）りては、割禮（かつれい）を受（う）くるも、割禮（かつれい）を受（う）けざるも益（えき）なく、惟（ただあらた）新（じゅぞうぶつ）なる受造物（えき）は益（えき）あり。凡（およ）そ此（こ）の規（のり）に遵（したが）いて行（おこな）う者（もの）は、願（ねが）わくは平安（へいあん）と慈憐（じれん）とを蒙（こうむ）らん、神（かみ）のイズライリも亦（またしか）然（しか）り。今（いま）より後（のちひとわれ）人我（わづらわ）を擾（なか）す勿れ、蓋（けだし）我（われ）は主（しゅ）イイススの瘡痍（きず）を我（わ）が身（み）に負（お）えり。兄弟（けいてい）よ、願（ねが）わくは我等（われら）の主（しゅ）イイスス ハリストスの恩寵（おんちょう）は爾等（なんぢら）の神（しん）と偕（とも）に在（あ）らんことを、「アミン」。

＊＊

（比較用　口語訳）兄弟たちよ。ごらんなさい。わたし自身いま筆をとって、こんなに大きい字で、あなたがたに書いていることを。いったい、肉において見えを飾ろうとする者たちは、キリスト・イエスの十字架のゆえに、迫害を受けたくないばかりに、あなたがたにしいて割礼を受けさせようとする。事実、割礼のあるもの自身が律法を守らず、ただ、あなたがたの肉について誇りたいために、割礼を受けさせようとしているのである。しかし、わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇とするものは、断じてあってはならない。この十字架につけられて、この世はわたしに対して死に、わたしもこの世に対して死んでしまったのである。割礼のあるなしは問題ではなく、ただ、新し

く造られることこそ、重要なのである。この法則に従って進む人々の上に、平和とあわれみとがあるように。また、神のイスラエルの上にあるように。だれも今後は、わたしに煩いをかけないでほしい。わたしは、イエスの焼き印を身に帯びているのだから。兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるように、アァメン。

＊＊

誦經）兄弟よ、我等は同労者として爾等に求む、神の恩寵を徒に受くる勿れ。蓋言えるあり、納るべき時に我爾に聽き、救の日に爾を助けたりと。視よ、今は嘉く納るべき時、視よ、今は救の日なり。我等何事に於ても躓を人に置かず、我が職の謗を受けざらん爲なり。我等凡の事に於て己を神の役者と顯す、即多くの忍耐に、患難に、窮乏に、困苦に、扑刑に、禁獄に、争亂に、勤労に、儆醒に、禁食に、潔淨に、知識に、恒忍に、仁慈に、聖神に、僞なき愛に、眞實の言に、神の能に於てし、左右の手に義の武具を以てし、尊榮及び耻辱に、惡評及び令聞に於てす、欺く者に似たれども、眞なり、知られざるに似たれども、知られ、死したるに似たれども、視よ、生けるなり、罰を受くるに似たれども、死に付されず、憂うるに似たれども、常に喜び、貧しきに似たれども、多くの者を富ませ、有るなきに似たれども、有らざるなし。

＊＊

（比較用　口語訳）わたしたちはまた、神と共に働く者として、あなたがたに勧める。神の恵みをいたずらに受けてはならない。神はこう言われる、「わたしは、恵みの時にあなたの願いを聞きいれ、救の日にあなたを助けた」。見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である。この務がそしりを招かないために、わたしたちはどんな事にも、人につまずきを与えないようにし、かえって、あらゆる場合に、神の僕として、自分を人々にあらわしている。すなわち、極度の忍苦にも、患難にも、危機にも、行き詰まりにも、むち打たれることにも、入獄にも、騒乱にも、労苦にも、徹夜にも、飢餓にも、真実と知識と寛容と、慈愛と聖霊と偽りのない愛と、真理の言葉と神の力とにより、左右に持っている義の武器により、ほめられても、そしられても、悪評を受けても、好評を博しても、神の僕として自分をあらわしている。わたしたちは、人を惑わしているようであるが、しかも真実であり、人に知られていないようであるが、認められ、死にかかっているようであるが、見よ、生きており、懲らしめられているようであるが、殺されず、悲しんでいるようであるが、常に喜んでおり、貧しいようであるが、多くの人を富ませ、何も持たないようであるが、すべての物を持っている。

＊＊

誦經）兄弟よ、爾等はハリストス イイススの意を以て意とすべし。彼は神の像にして、神と匹しくなることを僭うとせざりき、然れども己を虚しくして、僕の貌を受け、人と同じき者と爲りて、外形に於て人の如くなり、己を卑くして、死に至るまで順い、且十字架の死に至れり。故に神も彼を無上に高くして、彼に凡の名に超ゆる名を賜

えり、凡(およそ)天(てん)に在(あ)り、地(ち)に在(あ)り、及(およ)び地(ち)の下(した)に在(あ)る者(もの)の膝(ひざ)は、イイススの名(な)の前(まえ)に屈(かが)み、且(かつ)

凡(およそ)の舌(した)はイイスス ハリストスが主(しゅ)たるを承(う)け認(みと)めて、光榮(こうえい)を神父(かみちち)に歸(き)せん爲(ため)なり。

＊＊

（比較用　口語訳）キリスト・イエスにあっていだいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、 かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、 また、あらゆる舌が、「イエス・キリストは主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためである。

＊＊

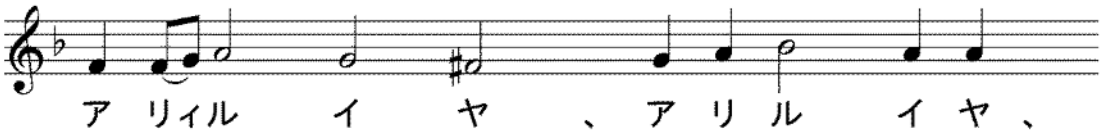
【　アリルイヤ　十字架擧榮祭前の主日第１調　及び　生神女誕生祭の第８調　】

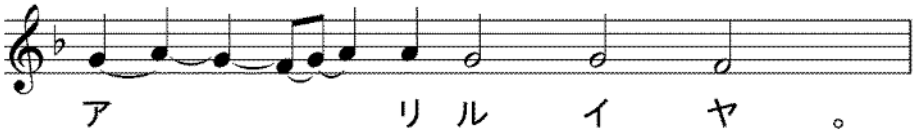
司祭）爾(なんぢ)に平安(へいあん)、

誦經）爾(なんぢ)の神(しん)にも、

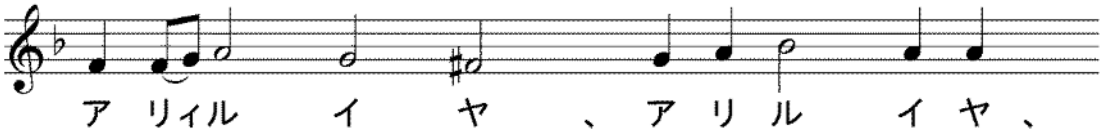
司祭）睿智(えいち)、

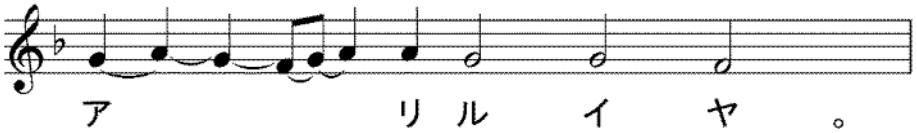
誦經）アリルイヤ、



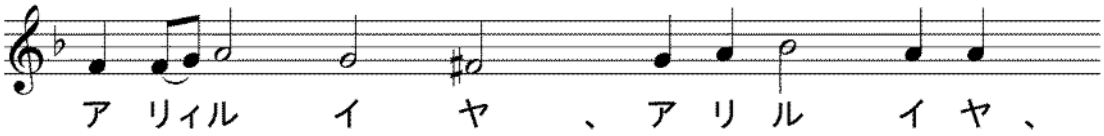


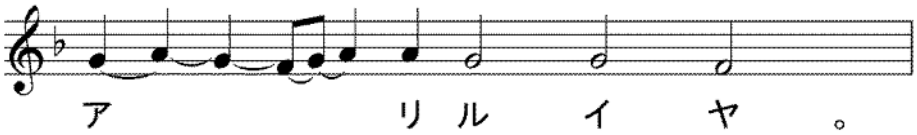
誦經）我民(われたみ)より選(えら)ばれし者(もの)を擧(あ)げたり、





誦經）女(ぢょ)よ、之(これ)を聽(き)き、之(これ)を觀(み)、爾(なんぢ)の耳(みみ)を傾(かたぶ)けよ、

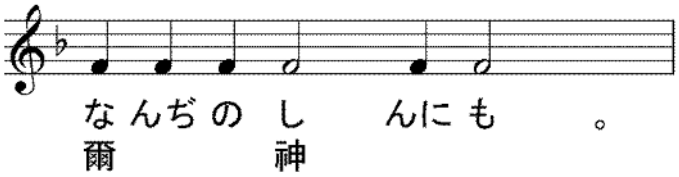




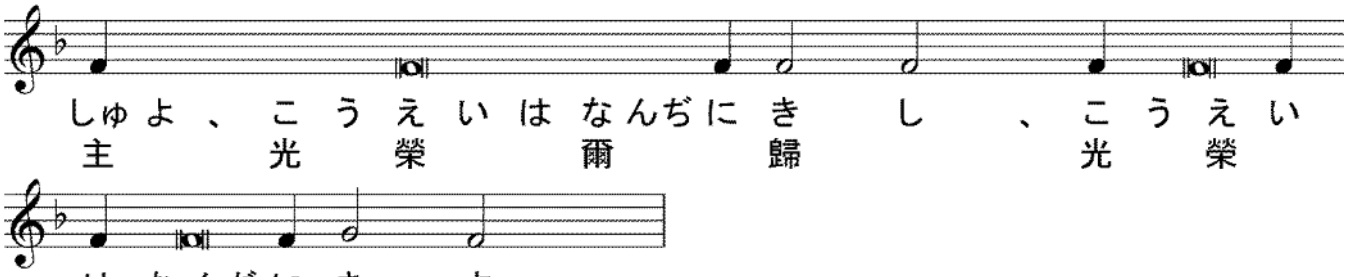
司祭)（ 黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誡を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。 ）

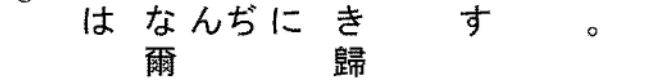
【 福音經（エヴァンゲリオン） イオアン福音書 9端 3章13～17節 （十字架擧榮祭前の主日）
マトフェイ福音書 105端 25章14～30節 （第16主日）
ルカ福音書 54端 10章38～42節、11章27～28節（生神女誕生祭） 】

司祭）睿智、肅みて立て聖福音經を聽くべし、衆人に平安、



司祭）イオアン傳の聖福音經の讀、





司祭）謹みて聽くべし、主謂えり、天より降りし人の子、仍天に在る者の外に、天に升りし者なし。モイセイが野に在りて蛇を擧げし如く、人の子も是くの如く擧げらるべし、凡そ彼を信ずる者の亡ぶるなく、乃永遠の生命を得ん爲なり。蓋神は世を愛して、其獨

生の子を賜うに至れり、凡そ彼を信ずる者の亡ぶるなく、乃永遠の生命を得ん爲なり。蓋神が其子を世に遣しは、世を定罪せん爲に非ず、乃世の彼に由りて救われん爲なり。

＊＊

（比較用　口語訳）主は彼らに言われた、「天から下ってきた者、すなわち人の子のほかには、だれも天に上った者はない。そして、ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである」。神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである」。

＊＊

司祭）主は左の譬を設けて曰えり、天國は他の地に往かんとして、其諸僕を召し、彼等に其所有を託したる人の如し。一人には銀五千、一人には二千、一人には一千、各其才能に應じて、之を與えて、直に起ち行けり。五千を受けし者は往きて、之を用いて、他に五千を獲たり。二千を受けし者も亦二千を獲たり。惟一千を受けし者は往きて、之を地に埋めて、其主の銀を蔵せり。久しくして後、此の諸僕の主歸りて、彼等と會計せり。五千を受けし者は他に五千を攜えて、就きて曰く、主よ、爾五千を我に託せり、視よ、我之を以て他に五千を獲たり。其主彼に謂えり、善い哉、善にして忠なる僕よ、爾は寡き者に於て忠なり、我爾に多く者を督らしめん、爾が主の歡樂に入れ。二千を受けし者も亦就きて曰えり、主よ、爾は二千を我に託せり、視よ、我之を以て二千を獲たり。其主彼に謂えり、善い哉、善にして忠なる僕よ、爾は寡き者に於て忠なり、我爾に多くの者を督らしめん、爾が主の歡樂に入れ。一千を受けし者も亦就きて曰えり、主よ、我爾が嚴酷なる人にして、播かざりし處に穫り、散らさざりし處に聚むるを知れり、是を以て我懼れて、往きて、爾の銀を地に蔵せり、視よ、爾の物は爾之を有てり。主彼に答えて曰えり、惡しくして惰れる僕よ、爾は我が播かざりし處に穫り、散らさざりし處に聚むるを知れり、故に我が銀を貿易者に託すべかりしなり、然らば我來りて、本銀と利とを受けしならん。故に彼より一千を取りて、十

千を有てる者に與えよ。蓋し凡そ有てる者には與えて、餘あらしめ、有たざる者よりは其有てる物も奪われん。無益なる僕を外の幽暗に投ぜよ。彼處には哀哭と切齒とあらん。言い畢りて呼べり、耳ありて聽くを得る者は聽くべし。

＊＊

（比較用　口語訳）天国は、ある人が旅に出るとき、その僕どもを呼んで、自分の財産を預けるようなものである。すなわち、それぞれの能力に応じて、ある者には五タラント、ある者には二タラント、ある者には一タラントを与えて、旅に出た。五タラントを渡された者は、すぐに行って、それで商売をして、ほかに五タラントをもうけた。二タラントの者も同様にして、ほかに二タラントをもうけた。しかし、一タラントを渡された者は、行って地を掘り、主人の金を隠しておいた。だいぶ時がたってから、これらの僕の主人が帰ってきて、彼らと計算をしはじめた。すると五タラントを渡された者が進み出て、ほかの五タラントをさし出して言った、『ご主人様、あなたはわたしに五タラントをお預けになりましたが、ごらんのとおり、ほかに五タラントをもうけました』。主人は彼に言った、『良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ』。二タラントの者も進み出て言った、『ご主人様、あなたはわたしに二タラントをお預けになりましたが、ごらんのとおり、ほかに二タラントをもうけました』。主人は彼に言った、『良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ』。一タラントを渡された者も進み出て言った、『ご主人様、わたしはあなたが、まかない所から刈り、散らさない所から集める酷な人であることを承知していました。そこで恐ろしさのあまり、行って、あなたのタラントを地の中に隠しておきました。ごらんください。ここにあなたのお金がございます』。すると、主人は彼に答えて言った、『悪い怠惰な僕よ、あなたはわたしが、まかない所から刈り、散らさない所から集めることを知っているのか。それなら、わたしの金を銀行に預けておくべきであった。そうしたら、わたしは帰ってきて、利子と一緒にわたしの金を返してもらえたであろうに。さあ、そのタラントをこの者から取りあげて、十タラントを持っている者にやりなさい。おおよそ、持っている人は与えられて、いよいよ豊かになるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられるであろう。この役に立たない僕を外の暗い所に追い出すがよい。彼は、そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう』。

＊＊

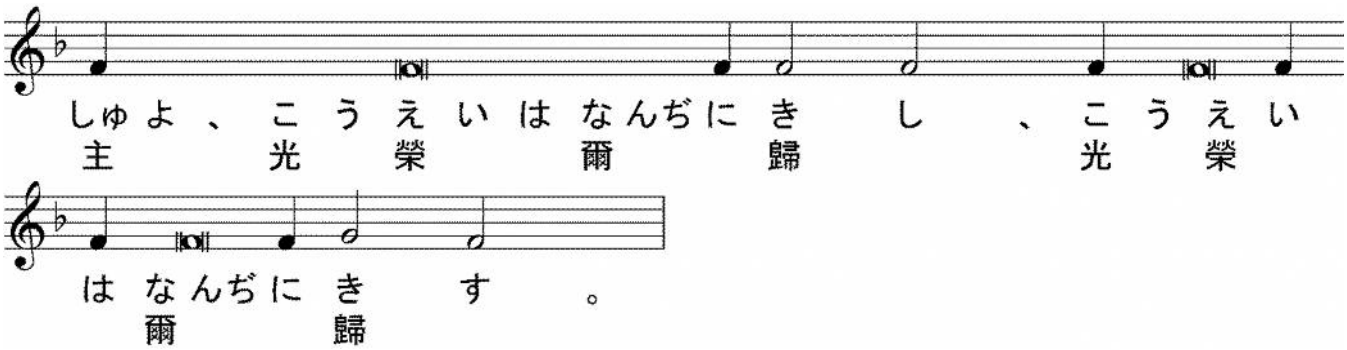
司祭）彼の時、彼等が行ける時、イイスス一の村に入りしに、或婦マルファと名づくる者、彼を其家に迎えたり。其姉妹にマリヤと名づくる者あり、イイススの足下に坐して、其言を聽けり。マルファは供事の多きに因りて心を煩わし、就きて曰えり、主よ、我が姉妹、我一人を遺して供事せしむるを爾意と爲さざるか、之に命じて、我を助けしめよ。イイスス彼に答えて曰えり、マルファよ、マルファよ、爾は多くの事を慮りて心を勞せり、然れども需むる所は一のみ。マリヤは善き分を擇びたり、是は彼より奪う可からず。此を言う時、一の婦民の中より聲を揚げて、彼に謂えり、爾を孕みし腹と爾が哺いし乳とは福なり。彼は曰えり、然り、神の言を聽きて之を守る者は福なり。

＊＊

（比較用　口語訳）イエスがある村へはいられた。するとマルタという名の女がイエスを家に迎え入れた。この女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、御言に聞き入っていた。ところが、マルタは接待のことで忙がしくて心をとりみだし、イエスのところにきて言った、「主よ、妹がわたしだ

けに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっしゃってください」。主は答えて言われた、「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである」。イエスがこう話しておられるとき、群衆の中からひとりの女が声を張りあげて言った、「あなたを宿した胎、あなたが吸われた乳房は、なんとめぐまれていることでしょう」。しかしイエスは言われた、「いや、めぐまれているのは、むしろ、神の言を聞いてそれを守る人たちである」。

＊＊



※聖体礼儀３（金ロイォアン）へ